
水の砂漠の魚たち

鷲生 智美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の砂漠の魚たち

【Nコード】

N8874V

【作者名】

鷲生 智美

【あらすじ】

高校生の光一が目を覚ますと、辺り一面、遠浅の海が”水の砂漠”のように広がっていた。岸边に辿りついた光一は、そこで暮らしていた少女にやや強引に勧められ、「新しい暮らし」を求める旅に出る。しかし二人の旅は、この世界を統治する帝国の中枢部で十七年前に起きた愛憎劇に決定的な影響を及ぼすことになる。帝国の平和のために光一に課された試練とは……。 (完結済みの草稿があります。一章ずつ推敲して木曜日か金曜日にUPします)。

プロローグ

ぴちゃん。

水の音が僕の耳を叩く。

ぴちゃん　　ぴちゃん。

その音は規則正しく、繰り返し僕の耳を叩き続ける。

「……っ！」

眼を覚ますと同時に、僕は反射的に手をついて頭を起こした。僕の両手は水底を這いつくばっていた。その水底から、3・4cm位の僕の手首の辺りの高さで、水面が波打っている。僕は上半身を起こし、両手で髪を後ろへかきあげ、濡れた顔を撫でて滴る水気を拭いた。僕は浅瀬の中に倒れていたらしい。

僕の周りには何もなかった。首をせわしなく回してまだ見ていない方角を探すが、何も見つけることはできない。僕は果てしない水平線に360度取り囲まれていた。まるで水の砂漠の真ん中にぽんと取り残されてしまったかのように。

僕は立ち上がった。つま先で立って遠くまで見渡す。それでも僕には薄紫の空と、ところどころ浮かぶ汚れた綿のような灰色の雲と、それを映す水面が作る水平線だけしか見えなかった。

泣きたいのだけれど、涙を流す余裕もなく、僕はとにかく歩き出す。歩き始めれば何か局面が変わってくれることを祈りながら。けれども、状況は何一つ変わらなかった。歩けども歩けども何も見えてこない。

僕の混乱は増していく。ここはどこだ。どこへ行けばいいんだ。どうやったらずら帰れるんだ。僕は走り出す。バシャバシャと足首の辺りで水が撥ねる。けれども状況は何一つ変わらない。僕は、浅い海の中に独りぼつんと立ち止まった。

ばちゃん。

僕は水底に腰を下ろした。寒くも暑くもない。何も無い。寒さや暑ささえ。あるのは、浅い海と薄紫の空だけ。僕の頭の中にも何も考えが浮かばない。いったいここはどこなのか。

誰か。ぼつりとその言葉が浮かんで僕は弾かれたように再び立ち上がった。誰かいないのか。誰か僕に教えてくれる人はいないのか。

とにかく誰か人をさがそう。僕の心によやく形をもった目標ができた。ここが海なら、しかもこんなに浅いなら、そう遠くないところに岸があるはずだ。そうきつとあるはず。僕から見えないだけで。

僕はよやく波の行方を観察できるだけの冷静さを取り戻した。波は確かに一方から来て一方へ押し寄せている。そうだ、この波に従っていけば岸にたどり着けるはずだ。僕はさっきまでと違って、ちゃんと方向というものを定めて歩き始めた。

あるのは波の方向だけではなかった。時間の流れもちゃんとあるようだった。薄紫色の空の端から墨のように黒い色が流れ出して来ている。日が沈み夜が訪れるらしい。やがて一面暗くなり、降り注ぐような星空が現れた。月はなかった。存在しないのか隠れて見えないのかはわからない。

とにかく僕は岸へ向かって歩き続けた。眠ろうなどとはこれっぽちも思わなかった。波と共に歩かなければ僕はそれ以外のことを考えないようにただ足を前に動かした。一時間か二時間か、あるいはそれ以上の時間が経っているのに浅瀬が続くばかりで岸は見えてこない。でも、そのことも努めて考えないようにしていた。

僕の斜め後ろが明るくなっていくようだ。でも僕はそちらの方を見ない。ただ足元の波を見つめてそれと同じ方向を目指して歩いていく。空腹だとも思わなかった。僕はただただ誰かに会いたかった。だからひたすら歩いていく。

夜が空け切ったころ、やっと遠くに何かがあるように見えた。僕は走り出した。駆けて駆けて、それが見間違いではなく陸の影であることがわかった。だのに僕の足はそこで動くのを止めてしまった。がくりと膝をつき、僕はまた再び海の中に崩れ落ちる。行かなくちゃ。行けば誰かに会えるかもしれないんだから。動かなきゃ。

でも、もう僕の身体は限界だった。

ぴちゃん　　ぴちゃん　　。

僕の耳を洗う、規則正しい波の音。その音を聞きながら、僕は再び眠りの底に引きずりこまれていった。

海から来た者

光一が眼をさますと、寝台の脇に長い髪の少女が座っていた。寝台の横に窓があつて彼女はそこから外を見つめていた。

横顔しか見えないけれど、その少女はとても美しかった。ふわりと軽くウェーブの掛かった栗色の髪。一本一本がとても細そうで動けばさらさらと音をたてそうだ。そして、それに縁取られる顔の肌は陶磁器のようなきめ細かな乳白色。高すぎない、けれどずっと筋の通った鼻がツンと窓の外に向けられている。唇はふっくらと珊瑚色をして、でも、今は固くきつく結ばれている。

そう。彼女の顔は各パーツの一つ一つが美しくそのバランスも完璧。全体に日本人より彫が深めで、よくできた西洋人形のように可愛い。しかし、決して彼女から人形のような印象は受けないのは、彼女の表情とその瞳の色のせいだ。

彼女は口を固く引き結び、そして美しい造作の瞳にとても強い色を宿している。まるで眼前に彼女の敵があり、それと対峙しているかのような緊張感に満ちている。

そしてその瞳の色は、どうみても、深い赤色なのだ。まるで赤ワインのような。こんな色の瞳の人間なんて見たことがない。外国人にだって、青や緑はいてもこんな瞳の色の人なんていないだろう。

いったい君は誰。そう光一が訊こうとしたその時、光一の視線に気付いたのかその少女は振り向いた。そして眼光鋭く光一をしばらく値踏みするかのように見つめていた。

「元氣そうじゃない」

整った形の大きな目を一つ瞬きさせると、彼女はあっさりとした口調で言い、立ち上がった。そして扉を指差す。

「じゃ、あつちの部屋で食事して。どこにも傷はないし、お腹が膨れて一晩寝れば大丈夫でしょ。それなら明日、旅に出発できるわね？」

「あ、あの……」

光一には何かなんだか分らない。今日にし耳にしているのが夢か現実かさえわからない。ただ、さっきから足がもの凄くだるい。浅い海の中を一晩掛けて歩いてきてやっと陸についたことは、今直面している事実と関係しているようだった。

で、ここはどこなのだろう。そして、この女の子は僕を助けてくれたんだろうか。それにしても、あまり僕に関心なさそうだ。敵ってわけでもなさそうだけれども。聞きたいことはいっぱいあるのに上手く質問が出ていない。光一はまどろっこしい思いでやっとここの口に出した。

「あのう……。ここはどこ？ 君は誰？」

「知る必要ないわ」

予想外の答えに光一は再び混乱する。

「あなたは『海から来た者』なんでしょ」

「え？ ああ、確かに僕は海から歩いて来たけど……」

「じゃあ、良かった」

彼女は初めて笑顔を見せた。

「私ずっと『海から来た者』に会いたい、って思ってたのよ。願いが適ってよかったわ。さ、食事して」

光一以外にも「海から来た者」という人がそれなりの数存在するような答えで、光一は少しほっとする。それでも、まだいろんなことが分らない。ただ、この少女は光一に積極的に説明する気がなさそうだと、ということは光一にも分かった。

「お母さん。『海からきた者』が目覚めましたわ」

少女は扉を開けて向こうの部屋へ、こう声を掛けながら出て行ってしまった。光一も慌てて後を追う。

隣の部屋にはカマドがあり、そのそばの机や壁にいろいろ道具がぶら下がっていて台所に該当するスペースのようだった。部屋の中央には食卓らしい大きな机があつて、お椀にスープのようなものが入っている。そして食卓の傍には女の人が立っていた。この女性も栗色の髪だけれども、瞳の色は常識の範疇のこげ茶色だった。そしてやはり色が白く、外国の人のように見えた。

「お母さん。やっぱりこの子は『海から来た者』よ。海から歩いて来たって自分で言ったもの。異世界から来た者に間違いないわ」

異世界？

彼女が光一を異世界の者だと言うなら、光一にとってこの少女も異世界の者だ、ということになる。

光一は辺りを見回した。窓の外にはどこまでもどこまでも続いていく海。それがどこまでもどこまでも深くならず遠浅であることは

自分がよく知っている。海のほかには砂浜。これも砂浜だけで人家が見当たらない。日本にこんな場所あるだろうか。あつたとしてもごく限られた場所だけだろう。

そしてこの人たちはどうみても日本人じゃない。それどころか、娘の瞳の色はこの国の人間にも普通にはあり得ない色だ。

大体僕は日本の自宅の近くにいたはずだ。自宅から海まで三十キロ以上ある。意識を失った理由がなんであれ、意識を取り戻したら海の中にいた、なんてことはありえない。何かとんでもない事態が生じなければこんな風に世界が変わるわけが無い。

確かに自分は異世界に来たと考える方が、そうでないと考えるより理に適っている。でも……。それなら一体ここは何処なんだ？僕はこれからどうなるんだ？ 光一は、自分の頭の奥が白く冷たくなつていくのを感じ、眩暈で崩れ折れそうになるのをこらえた。

旅への誘い

「ともかく、食事をお食べなさいな」

母親が光一に食卓につくよう促した。

「あ、有難うございます。……でも、僕あまり食べる気になれないです」

「きつととても動転しているのね。でも、少しでも食べれば気持ちも落ち着くかもしれないわ」

思いやりの籠った温かい口調だった。光一が席に座ると、この母親も共にテーブルについた。

味の薄いクリームシチューのような、乳で野菜と肉を茹でたものを口に運びながら、光一は娘の方が答えてくれなかった質問を母親に尋ねてみた。

「あのう。ここは一体どこなんですか」

「ここは、『土の国』の『砂浜の村』よ。『煉瓦の街』から遠く離れた……。でも、『海から来た者』に意味がある答えではないでしょうね」

「ええ」

確かに光一が聞きたいのはそんなことじゃない。

「いい？ でもここが『砂浜の村』だってことは旅に出たら忘れてよね」

娘の方が光一に向かって釘を刺すように言った。

「僕は旅にでるんですか？」

さつきからこの娘は光一と旅に出ることを前提に話を進めていくけれども一体どこへ、何をしに行く旅だというのだろう。

「ええ。貴方は自分のいた世界に戻りたいでしょう？」

「それは……まあ。でも、ここはどこ……ええっと、つまり僕がいた世界とどういう関係にある場所なんでしょう？」

母親が優しい笑みで答えてくれる。

「違う世界なのは確かなの。こちらの世界に時々貴方のようにやってくる人がいるわ。皆海から歩いて来るの。そして『海の源流』までさかのぼって、そこから元の世界に帰って行くのよ」

「帰れるんですか？ その『海の源流』ってところに行けば」

「ええ、そうよ。大丈夫。帰ることはできるわ」

「帰りたいでしょ。ね？ だからあなたは私とコウトへ行くの」

母親の話で見えかけていたものが、娘の話でまたよくわからなくなる。コウト、って何なんだよ。

「ナイア、この人は自分の住む世界と全く違う世界に今来たばかりで何もわからないのよ。もっと順を追って説明しないと」

娘はナイアという名前らしい。母親はナイアに注意すると再び光一に説明を始めた。

「あなたの世界がどのようなところかわからないけれども、時々そうね、四、五年に一度くらいと言われているわね、こちらの世

界とは違う世界から海を歩いてやって来る人がいるそうなの。私たちがそういった人を『海から来た者』と呼んでいるわ」

「はい」

「それから、さっき私はここを『土の国』といったわね。この『土の国』は、リヴァイエ帝国に属しているの」

「リヴァイエ帝国……」

「『海から来た者』は皇帝の住む皇都に行くように決まっているわ。皇帝も貴方たち『海から来た者』と会いたいと思っただけじゃありません。そして、皇都にある『海の源流』から元の世界に戻ることができるの」

皇都　　ナイアが言ったコウトというのがこのことらしい。

「だから、『海から来た者』と、その者を案内する人間は、許可なく国境を越えて旅をすることができますし、その間の宿や使った乗り物の費用も掛からないの。後から帝国府が立て替えてくれるから」

「つまり、僕と僕の家内人はタダで旅行が出来るということですか？」

「ええ」

光一は初めて緊張のとれた顔をして、ナイアに向かって言った。

「そうか。それで、君は僕と一緒にタダで旅行がしたかったんだね」

「タダ、ってだけじゃないわ。無許可でできるのが助かるの。とにかく、私も旅が出来るし、あなたもおうちへ帰れる。貴方にとっても私にとってもいい話でしょ」

「あ……」

光一が何かを思い出した顔をした。そして少し困った顔で視線を机にさまよわせ、考え込む。そして、顔を上げて、母親に真剣な声

で持ちかけた。

「あのお。ここに残る、っていう選択肢はありますか？」

母親は返す言葉が見つからない様子で、光一を驚いて見つめている。ナイアも一瞬呆けていたが、大きな声を出して言った。

「ちょっと、何それ？ あなた家に帰りたくないの？」

「家には……帰りたいけど……。元いた世界に帰りたいかと言われると、ちょっと違うかな、って。絶対帰りたくないってわけじゃないんだけど……」

「どうしたいのよ？」

「だから……、もうちょっとこの世界のことを知って、こっちの方が良かったらこっちに居ようかなと思うんだけど。あの……ダメですか？」

母と娘は顔を見合わせた。両方の顔に困惑の表情が浮かんでいた。

浜辺の者

母親はしばらく言葉を探すように沈黙した。そしてしばらくしてから光一に尋ねた。

「貴方、お名前は？ ええと、人に名前を聞く前に私から名乗るべきね。私の名前はマイア、そしてこの娘がナイア」

「あ、どうも。僕の名前は、光一です。小林光一です」

光一は軽く頭を下げて自己紹介した。

「コイチ、変わったお名前ね。あくまでこちらの人間からするだけでも。そのお名前は貴方のご両親がつけてくれたのでしょうか？」

「はい」

「きつと愛情を込めて選んでくれた名前だと思うわ。貴方はご両親に会いたくないの？」

「会いたい、会いたいです」

光一の目に涙が浮かぶ。でも、それよりも。

「でも、僕、学校でイジメにあつて……。親には隠してるんです。きつと心配すると思うから。でももう僕……。もう……。僕、前から……。前からこの世から消えたい、って思うことがあったんです。だから……。だから、こうなつてちよつと良かったのかも……」

「イジメ？ 何それ」

とナイアが尋ねた。

自分の受けているイジメを思い出そうとして、光一は自分の頭の奥が冷たく縮こまるのを感じた。いつものアレだ。学校の教室でクラスメート達が、まるで光一など存在しないかのように振舞うときに、光一は所在無さと同時にいつもこの頭の奥が冷えるような感じを味わう。

彼の通っている高校の教室に、彼の居場所はなかった。

子供の世界では小学校の半ば頃から教師の見えない所で棲み分けが始まる。見た目がカッコよく、実際モテて異性との話題が絶えないグループ。学業優秀で試験での順位を気にするグループ。このグループほど優秀ではないけれど、それなりに成績も良く試験の順位も中くらい、そして成績同様何事においても無難なところに落ち着いてじつと地味に棲息しているグループ。それとは別に、自分の好きなものの世界にとっぷり入り込んで、同類たちと学校で集まっている「オタク」グループ。クラスはこういったグループに分かれていて、そして大体この順番にヒエラルキーというものが存在する。

光一はそのどれにも入ることができなかった。中学までは、何事にも無難に振舞う地味なグループに所属していた。今彼が通っている高校でもその気になっていればこのグループに所属することが出来ていたのかもしれない。

光一は高校入学と同時に東京からこの街に引っ越してきた。父親は大手企業に勤める、いわゆる「転勤族」だった。会社のことは何も話さない父だったが、今回の人事には不満があったようで「落ちち」などという言葉を口にしたのを光一も聞いたことがある。

光一の心の中にもどこかで、自分とこの街で生まれ育った生徒とは異質なのだという気持ちがあったのかもしれない。四月の桜の頃、

新しい制服に身を包んだこの高校の生徒たちが、生存競争でもするかのような勢いで仲間づくりをする中で、光一はどうにもそんな気になれずぼんやりと過ごしていた。

「ねえ、アドレス教えてよ」

「いいよ。お前のもな」

桜が散ると同時に、教室のそこかしこでそんな遣り取りと、ケータイを付き合わせる光景に光一は出くわした。その度に彼は自分のポケットに入っているケータイが急に重く感じられ、そして頭の奥に冷たいものを感じた。

僕にも教えてくれよ。光一がそういえばアドレスだけは教えてくれたかもしれない。けれど、そうしたところでメールが送られてきたかどうか。多分、送られることは無かっただろう。

そのうち、クラスメート達の学校の中での関係は、学校の外でのケータイを通じた交流関係の一部になってしまった。学校の中でしか彼らと顔を合わせない光一には、もう立ち入る隙は残っていなかった。

一人ぼっちでもいいじゃないか。光一は一人ぼっちになりたい訳ではなかったが、なったらなつたで仕方ない、くらいに考えていた。

しかし事態は彼が思うよりもっと深刻だった。「グループに属することができない」ことは何か重大な欠陥だったのだ。光一は単に「一人で居る人間」、ではなく「人間としての能力を欠くモノ」として扱われるようになった。

たいていにおいて、彼はその存在を無視された。周囲のクラスメ

ト達は光一を見えない者のように扱っ。彼が傍にいたって全く目もくれない。たまたま転がっている石をよけるかのように彼の横を通り過ぎる。彼らの方から話しかけることなど全く無く、彼が何か話しかけても風の音のように聞き流された。

彼は毎日、頭の奥の冷たさを持って余しながら、遠くから聞こえてくる教師の指示や始業終了のチャイムの音に無表情に従うことで、ただただ時間を潰していた。

とはいえこの時間つぶしはなかなかの重労働で、彼はこういった日常を耐え忍ぶだけでその日のエネルギーを使い果たしてしまう。だから彼に未来について建設的なことを考える余裕はなかった。ただぼんやりと、頭の中に絶望という言葉がちらつくだけだった。

時折、イジメらしいイジメも受けることがある。皮肉にもそれは彼を本当の絶望から少しだけ遠ざけてくれる。

クラスメート達が珍しく声を掛けてきたと思ったらそれはたいいて無理難題だ。そして光一が困っていると殴ったり蹴ったりと暴力を振るう。身体は痛い。けれども彼の胸の中に微かに喜びが起きる。それは、自分は誰にも見えない幽霊ではなかったのだと安堵する気持ちだ

誰からも無視されていると、光一は、果たして自分という人間は存在するのだろうか、という焦燥感を感じる。ほんの時たまでも、そしてそれが悪意や蔑意でも、自分になにかしらの感情を向けられていることは、完全な無視よりも救いがあった。

でも、そんなの救いでも何でもない。救い、というのは今のようなシチュエーションのことをいうんだ。と、彼は今ナイアの家

の台所で椅子に腰掛けながら拳を握った。どうしてだかわからないが、自分は異世界に来たのだ。これはチャンスだ。

「だから、僕は……僕はこちらの世界がそんなに悪いところじゃないなら、こちらの世界に居たいんです」

光一はナイアよりも、主に温厚そうなマイアに向かって話をしていった。ところが、先に口を開いたのはナイアの方だった。

「あなたの言うこと、私よくわかる。苛められているのって嫌よね。わかるわ。でもそれなら『砂浜の村』にいても解決しないわよ。やっぱり旅をしないと」

光一には意外な成り行きだった。この気の強そうな少女が、「イジメ」にすんなり同情してくれるとは思っていなかった。どう見ても彼女は苛められる側ではなく、どちらかと言えば苛める側に回りそうに見える。

そうでなくても、弱気な人間を見ると説教を 例えば、どこにだって生きて行く限り似たようなことはある、皆辛くても我慢しているの、だからあなたも逃げちゃだめ そんな、先生や親戚のおばさんのするような説教を、高飛車に言いそうなタイプに見えたのだ。

でも、ナイアの言っているのは少し違うようだ。そして、どうしてここでもまた「旅」が出てくるんだろう。

「あのね。この村にいたって苛められるだけなの」

ナイアは面白くなさそうな顔で話し始めた。

「『砂浜の村』の住民は賤しいんですって。そういうことになってるの。『煉瓦の街』なんかに行くと私たち『砂浜の村』の住人は、『浜辺の者』って呼ばれて差別される。まあ、苛められるっていうわけ」

例えば、とナイアは話を続ける。

「『煉瓦の街』の住人が歩く歩道の上を、『浜辺の者』は歩けないわ。馬車が通る道の隅っこを歩くの。あ、人も馬車も向こうは避けてくれないわよ。私たちは人の目に見えないことになってるの、汚らしいから。だから向こうからばん当たって来る。痛い目に遭いたくなければ私たちの方がずっと緊張して避けなければならぬ」

「……………」
「服もね、決まっているの。麦を運ぶ麻袋をね、一度ほどいて、頭と腕のでる袋に縫い直すの。それを被ってこうやって紐で結ぶ。ほら」

彼女は立ち上がって全身を彼に見せた。確かにそんなつくりのみすばらしい服装だった。そして母親もまた全く同じ格好をしていた。

「それからね。この村の中にいれば差別されずに済むかっていうとそうもいかない。私と母さんは余所からの流れ者だもの。だから村からうんと離れたこんなところに住んでいるのよ。村の人たちは、必要最小限の用事のある時しか私たちに口を開かないわ。私が小さな頃、高熱で死に掛けたことがあったけど、その時だって村の医者には私を診てくれなかった。それから、うちの屋根が壊れた時だって誰も修理してくれなかったわ。私が自分でよじ登って穴を塞いだのよ」

「……………」

光一はどう返事していいのかわからない。ナイアは気の毒がって欲しそうなわけでもなく、むしろ何か意気込むかのように光一に向かつて話す。それがどうしてなのか彼にはわからないが、ともかく話の内容からするに、この村にいてはナイアにも光一にもあまり救いはなさそうだということは分った。

「私はずっと『海から来る者』を待っていたの」

彼女の赤ワイン色の瞳が強く光った。

「そして、一緒に旅に出るんだ、って願い続けてきたの。この村を出て行くのよ。皇都って随分遠くにあるもの。遠く離れたところまで行けば、誰も私のことを知らない街がある。そこに行けば、名前を変えて、『浜辺の者』であることも隠して、全く新しい人生を送ることができるわ。そう、できる。やってみせる」

彼女は光一をみて、にこっと笑った。そして光一に握手を求める。

「ねえ。私達って似たもの同士ね」

そういわれて光一はどきまぎする。こんな美少女、それも気の強そうな女の子と「似たもの同士」になるなんて。

同じクラスの女子たちにも派閥はある。もっともイジメの対象となっている光一にとってはどのグループの女の子だって何の縁もないけれど。もしナイアみたいな少女がクラスに居たら。彼は女子たちのヒエラルキーの頂上にいる女生徒の顔を何人か思い浮かべた。きっとあの子たちを蹴散らして女王様として君臨するに違

いない。

こんな女王様みたいな女の子が、僕のことを「似たもの同士」なんて言ってくれる。

光一は、ぼうつとした頭でナイアの差し出した手を握った。

「ね。だから一緒に旅をしましょう。今までの自分を知らない街で、新しい人生を生きるのよ」

ナイアの目には強い意志の力が漲っており、それを見返した光一も息を吸い込む。

「うん」

そのやりとりを見ながら、マイアは眉を顰めて思案していた。

旅の始まり

翌朝、光一はナイアと共に出立した。マイアとナイアの家は、外から見ると本当にみすばらしかった。そもそもそれは住居というにはあまりにも小さく、物置小屋のようでさえあった。壁は煉瓦積みでできているけれども、全体に色褪せあちこち崩れかかっている。屋根も初めはちゃんと葺かれていた痕跡はあったが、いかにも素人が穴を取りあえず塞いだ、という感じの箇所がいくつもあった。扉も窓枠も古びてまるで廃材がくっついていているようだ。

ナイアは自分の生まれ育った貧しげな家を一瞥すると、ふん、と鼻息一つついた。そして見送りにでた母親に視線を向けて簡単な別れを告げる。

「それじゃあ、母さん。私行くわね」

「ええ……。気をつけてね……」

そしてくると背を向けて歩き出そうとした。

「あ、あの……」

光一は立ち止まったまま、先に歩き出したナイアの背中にたまらず声を掛けた。

「何？」

「あの、何と云うか、もうちょっと……。あのさ、もしかしたらお母さんともう会えないかもしれないんだろ。もう少し、あの、何か言ったほうがいいんじゃないかな」

ナイアは冷ややかに光一を見、そして同じく冷ややかな視線で自分の母親を見た。それから再び光一に向けて説明した。

「昨日も言ったと思うけど、もともと母さんはこの人間じゃないの。皇都に居たのよ。それがなんでだか絶対理由を教えてくれないけど、この『砂浜の村』に流れ着いて私を産んだの。おかげで、私は『賤しい生まれ』なんてことになってるし、そのうえ、その『賤しい』人達の中でも仲間はずれってことになっちゃってるわけ」

母親は俯く。

「どうしてこんな所で私を産んだの、ってずっと母さんを責めてきたけど、今はもういい。だってそれは母さんの人生だもの。母さんはそうしなかったのよね？ 好きにすればいいわ。でも私はもうたくさん。私はこれから私自身の人生を切り開くわ。ここから出て行く」

その口調は決して母親を赦すものではなく、冷たく切り捨てるものだった。

「最後に」

ナイアは顎を上げて母親に尋ねた。

「最後にもう一回だけ聞いておくわ。母さん、なぜ皇都に住むなんて恵まれた立場を捨ててこんなところに流れてきたの」

優しい大人しげな雰囲気のマリアが、強い意志を込めた顔になってきっぱり言った。

「それは言わない。貴女も知らないほうがいいの」

それから複雑な表情で娘に念を押した。

「貴女、『砂浜の村』を出たら名前を変えるって言っていたわよね。私の名前にも貴女の名前にも似ていない、全く新しい名前にするって。そう私と約束したわよね。それだけは絶対に守って頂戴」

「ええ、もちろん。私は新しい名前を生きるわ。そうだ。新しい名前ならコーイチにつけてもらったらいい。あっちの世界の名前をつけてもらうの。そしたらこっちの世界では珍しい名前になるんじゃない？」

「え……」

いきなり話題を振られて光一はあたふたする。マイアはちよつと寂しげな顔で頷き、そして光一に言った。

「コーイチ、娘のことを宜しくお願いしますね。名前のも、それから旅の間のいろんなことも」

「この子より私の方がずっとしっかりしてるじゃない。大丈夫よ。あ、でも名前の方はよろしくね」

ナイアは光一に一声掛けると、母親を無表情に見て言った。

「それじゃ、さよなら。母さん」

そして踵を返して歩き出した。光一も慌ててついていく。

彼女の家の周りは何もなかった。見渡す限りの砂浜に、小さな小屋がポツンと立っているだけだった。だから、マイアがその小屋の前にならずと立って娘を見送っている姿が、いつまでも何にも遮られ

ることなく見ることが出来た。光一は何度か振り返って、マイアが黒い小さな点になるまでずっと娘を見送っているのを見たけれども、ナイアの方は砂浜に建つ貧しい家など一顧だにせず、ただ前だけを見て歩いていた。

何にも無い砂浜がずっと続いていった。海面とほとんど高さが変わらないままの砂浜が陸の奥まで延々と続いている。平坦な土地のうんと遠くに牛や羊の影が見え、立木が一行に行儀よく並んでいた。

「あの、ずつとこんな感じ？」

「そうよ。『煉瓦の街』に着くまではずっと砂浜」

二人ともマイアの作った皮製のサンダルを履いている。砂浜の砂はサラサラで、サンダルの中に入ってきててもそんなに不愉快ではない。

空を見上げれば、高い空がどこまでも広がっている。暑くもなく、寒くもない。空の色は、これから新しい人生が始まる春のうきうきした気分にも、何かに別れを告げる秋のような寂しい気分にも、そのどちらにも重ね合わせることでできそうだった。

光一の目にじわつと涙が浮かびそうになる。彼は慌てて、ナイアにこちらの世界について思いついたことを質問して気を紛らわそうとした。

「今、季節は春？ 秋？」

「暦の上では春ってことになるわ。でも、ここらあたりはあまり気候に変化がないの。別の国では暑さや寒さがあってその都度衣服を変えるらしいけど」

ああ、と光一は思った。光一も昨日からずっとシャツ一枚で過ごしている。

「あの、着替えとかはどうするの？ 何も持ってないけど」

「必要になったら手に入れればいいわ。ああ、村が見えてきた」

ナイアが言うとおり、前方にいくつかの家が集まっているのが見えてきた。

「あそこでお昼にしましょう」

ナイアと光一は村の中に入っていく。村の者は誰もナイアに声を掛けようとしない。そのくせ光一には好奇心満々に不躰な視線をぶつけてくる。

けれども仕方ない、と光一は思った。確かにこの人間にとって自分はさぞかし奇異に見えるんだろうから。

ナイアを初めて見たときも彫が深いと思った。でも、この村の人はナイアよりも更に一段と彫が深いように思う。眼窩が落ち窪んでいるかのようでその隣に鼻が高い壁のように聳え立っていた。色は白いが、ナイアの肌がきめ細かいのに対すると、ちよとがさがさした感じだった。そして皆やたらと背が高い。光一は日本にいても小柄で和風顔だから、僕はこの人たちには本当に異世界の者に見えるのだろうな、と彼は思った。

もつとも、光一が一目見て異界の者だとわかる風貌なのは、随分と便利なことのようにだった。

「ここが『砂浜の村』よ。さ、お昼をもらいましょ。どの家がいい

「？」

ナイアは立ち止まり、光一に向かって言う。

「え？ どの家って……。君のほうがよく知ってると思うんだけど」「どこの家も似たようなものよ。どこも貧しくて、私と母さんを嫌ってる。どこでも私にとっては一緒だから、コーイチを選んで」「……じゃあ、ここにしようかな」

ナイアは光一が指差した家のドアをノックした。出てきたのは、やはりとても背の高い、そしてナイアより一層彫の深い、色白の中年の女だった。彼女はナイアを見て露骨に嫌そうな顔をした。

「なんだい」

「見て。『海から来た者』よ」

ナイアはそういつて光一の手を引っ張りその女の前に突き出した。女は目を見開いて光一を眺める。彼が「海から来た者」だと、一目で納得したようだった。

「おやまあ、ほんとだ。のっぺりしてるねえ。……で、何が欲しいんだい」

「お昼ご飯を頂戴。それからこの瓶に飲み物を入れて。二人分ね」

ナイアは鞆から持ってきた陶製の瓶を渡してそう言った。女は首を竦めただけで無言で家の中に戻っていった。

「のっぺりしてる、って僕の顔のこと……なんだろうね。やっぱり」「そうよ、この辺でコーイチみたいなお顔の人間なんていないもの。『海から来た者』は『顔がのっぺりしている』のが特徴だって聞いた」

てたけど、本当にコーイチの顔って平べったいわよね」

「……………」

「助かるわ。すぐ信用してもらえるし」

「……………」

中年女が両手に紙包みを持ち、脇にナイアの渡した瓶を抱えて戻ってきた。

「ほら。水と食料だよ」

ナイアは無言で受け取りそのまま踵を返した。中年女も厄介払いするようにバタンと扉を閉めた。光一は呆気に取られてナイアとドアを交互に見る。

「何ぼうつと突っ立ってるの。早く来なさいよ」

ナイアが振り向いて言った。

「あの、お礼くらい言った方が良くない？」

「いいのよ。後で帝国府が二食分の食料と飲み物を給付してくれるんだから。多分ここらじゃ手に入らないような珍しい品をね。私達に物をやった方があの人たちにとっても得なの。だから普段口を利くのも嫌な私にでも物をくれたのよ」

それでも光一は閉まったドアに一礼して、立ち去っていくナイアを追いかけた。

地理と文字と魚

「砂浜の村」を離れたところで、二人は腰を下ろした。何も無いのでやはり砂の上に座った。村の中年女がくれたのは、丸いパンのようなものに、チーズとハムが挟まったもので、チーズが少々獣臭い以外は光一にとっても違和感のない食事だった。

食後、一服しているときに、光一はナイアにこの世界の地理について訊ねた。「旅をする」と言われて後を付いてきているが、自分がこの世界の何処にいて何処に向かっているかわからない。そもそもこの世界の何処に何があるのかさっぱりわからないのだ。

「あのさ、地図みたいなものないかな」
「地図？」

ナイアは砂の上につうつと横線を引っ張った。どうやら砂の上に描いてくれるつもりらしい。

「こつちが海。こつちが陸ね」

ナイアは指で横線の下を海だと示し、上を陸だと示した。そして海岸線を表す横線からよろよろと縦に波線を引いた。

「これが河。ねえ、あなた達の世界には河が何本もあるって本当？」

奇妙な質問に光一は面食らう。

「え？ うん。たくさんあるけど？」

「へえ。こつちはこの河だけよ。海に注ぐまで枝分かれするけど、

源流は一つ。皇都にあるの」

「それが『海の源流』？」

「そうよ。皇都から流れた水が河になって海になるの」

「河には名前がないの？」

「普通は『河』としか呼ばないけど、ラクロウ河って名前はあるわ。『生命の道』って意味の古語なんだって母さんが言ってた」

そういつてからナイアは辺りを見回した。誰かが自分の話を聞いていないか確かめるかのように。

光一は特に何も考えず、自分が覚えやすいようにナイアの描いた波線の横にカタカナで「ラクロウ」と書いた。ナイアはそれを見ると弾かれたように頭を上げ、驚愕の表情で光一を見た。

「それは……、まさか文字？」

「え？ あ、うん。そうだよ。やっぱり君たちの世界の文字とはだいぶ違うんだろうね。でも、これが僕の世界での文字なんだ」

光一は、ナイアはこちらの世界とあちらの世界で文字が違うことに驚いているんだと思った。しかし、ナイアの驚きはそこにではなかった。

「文字はそりゃ違うんでしょうけど。で、文字を知っているなんて貴方、ひよつとして凄く身分が高いの？」

「へ？ 身分？ いや、僕は普通の高校生だよ。ウチだつてごく普通のサラリーマン家庭だし。……苛められてるくらいなんだから強いて言えば僕の身分は低い方かも」

「それなのに、文字を知ることを許されるの？」

「……？ 許されるも何も、学校で強制的に勉強させられるよ」
「へええ。いいわねえ」

ナイアは心底羨ましそうに言った。

「じゃあ、君は字の読み書きは出来ないの？」

ナイアはムツとした表情を浮かべた。それから複雑な表情をして考え込み、再び周りを見回してから光一にそつと話しかけた。

「あなたとは一緒に旅をするものね。あまり隠し事をしてても仕方ないわ。あのね、私は文字を読むことも書くこともできるのよ。それからこの帝国の地理だって知ってる。でも、絶対にそのことを誰にも言つては駄目」

「文字を知ってるってことは、この世界ではきつととても珍しいことなんだね？」

ナイアの話の内容と話し振りに光一はそう見当をつけた。

「珍しいだけじゃない。普通の民は文字を知ることが禁じられているわ。地理に詳しいのも怪しまれる」

「じゃ、君はどうして知ってるの？」

「母さんよ。母さんが教えてくれたの」

「それは君のお母さんが特殊な人だっていうこと？」

ナイアは苦虫を噛み潰した様子で言った。

「そうだったみたいね。でも母さん、自分が皇都にいたってことしか教えてくれないの。昔のことは全部秘密。そして私が文字を知っていることも村の人たちには絶対秘密。貴方もこの先そんなこと誰にもばらさないでよね？」

ナイアの目はとても真剣で、光一も真面目な顔をして深く頷いた。

「うん。絶対喋らない。約束するよ」

ナイアは光一の約束と引き換えるように、再び地図を描き始めた。

「河が海にでる出口にあるのが『煉瓦の街』よ」

「今から向かうところだね」

「そう。『煉瓦の街』は『土の国』の首都でもあるの」

ナイアは海岸線から半円状に国境を描いてみせる。

「『土の国』には土しかないの。だから皆家は煉瓦で建てるしかない。木は生えるには生えるけど、ちゃんと人間が世話をしてやらないと育たないわ。あとは牧草が生えるくらいね。だから、みんな羊と牛を飼って暮らしてる」

「魚はとらないの？」

光一の質問にナイアは物凄く不愉快そうな顔をした。

「冗談じゃないわ。とんでもない。食べない、絶対」

「どうして？」

「どうしてって……。決まってるじゃない。魚は死者の魂だからよ」

「へえ……」

「貴方達の世界はそうじゃないの？」

「人は死んでも魚にはならないと思う」

「……こちらの世界ではね。人が亡くなるとその骨は河に流すの。そうして海に流れ着いた死者の魂は魚になるのよ。そして、その魂に再び定められた時がくれば雲に乗って、皇都の『海の源流』に降り注ぐ雨の滴になる。皇帝は、『海の源流』に滴り落ちてきた魂に、

住む土地と運命を与える」

「……………」

光一には、それが事実なのか神話なのかわからない。全くの異世界ならそれが事実であるのかもしれない。それとも、人の生き死にそのものは自分の世界と同じで、ただそれに対する意味づけが違うだけなのかもしれない。

「私達『浜辺の者』が卑しいって言われるのはね。きっと魚を口にしているに違いない、て思われてる部分も大きいからなの」

「食べてないのに？」

「私達は食べない。でも、遠くの人たちは好き勝手言う。それに魚のいる海のそばに住んでるだけでもなんだか薄気味の悪いものだと思うらしいわ」

そういえば、と光一は思う。不動産がどうこうという話を両親がしていたときに、やはり「墓地のそばは地価が安い」みたいなこと言ってたっけ。死者の眠る場所と近いというだけでも何か忌み嫌われるものなのかもしれない。

「まあ、『煉瓦の街』の橋を渡るまでは、私の顔を知っている人もいるから、ちよつと嫌な思いをするかもしれない。でも河を上る船は河の対岸、つまり橋の向こうにあるの。そこまで私は行ったことがない。そこなら私が『浜辺の者』出身だって直接知る人も少ないからずつとマシになるわ」

「僕達、河を上るの？」

光一の質問に、ナイアはああ、といった顔をし、再び砂上の地図に指を落とした。

「『土の国』よりもつと陸の奥に入ると今度は『石の国』があるの。そこから更に上流に『森の国』があるのよ。そして皇都はこの『森の国』にある」

ナイアは、海を示す横線の上に、河を示す縦の波線を中心に三つの鏡餅を重ねるようにして地図を描き上げた。

「これだけ？……随分単純なんだね」

光一の想像する世界地図というのはもつとごみごみしていたものだったので、思わずそう口にしてしまった。それで、ナイアは少々気を悪くしたようだった。

「これが全部つて訳じゃないのよ。河から外れた地域に他にも国があるそうだし。それに、もつと河から遠ざかった地域には蛮族がいるらしいわ。皇帝に従うのもいるけど、齒向かうのもいて、皇帝軍が警邏しているとか聞いたこともある」

でもね。とナイアは続ける。

「私達は皇帝に住む場所を与えられるとそこからの旅は原則禁止だもの。あなた達『海から来た者』の案内は例外として。あと帝国府のお役人とか特別に許可を得た者も旅はするわね。でもそれは河を使って皇都と往復するだけ。それから荷物も皇都からの河を上り下りする。とにかく移動は河で皇都と行き来するだけだから河沿いの国のことしか話は伝わらないものなの。だから河から離れた地域がどうなっているか知っている者はこちら辺りでは少ないはずよ」

それでも。と今度はナイアはちよつと得意そうになった。

「私は随分いろんなことを知っている方だと思うわ。母さんからいろいろ聞き出したもの。母さん自身は一度皇都から『砂浜の村』まで旅をしているでしょ。だから、『石の国』『木の国』だって一度は見ているの。それから、絶対内緒だけど私は文字が読めるでしょ。ウチの床下にこっそり隠してある書物だって読めたの。だから私はとても物知りなのよ。よかったわね、コーイチ、案内人が私で」

「あ、うん。そうみたいだね」

確かにナイアの話の話を聞いていると、ナイアはこの世界でも結構情報通なのかもしれない。それに、テキパキものごとを決めていく性格は、あまり自分でものごとを決めたくない光一にとって楽な存在だった。

「うん。君が案内人で助かるよ」

ナイアはニコツと笑うと立ち上がった。

「さあ、そろそろ次の村に向かわないと夜泊まれないわ」

「次の村？ 次の村はなんていう名前？」

「名前？ 次の村も『砂浜の村』よ。言っとくけど『砂浜の村』は一箇所だけじゃないのよ」

ナイアは足元の地図に描かれた海岸線を、足ですうつとなぞった。

「浜辺にある集落のことはみんな『砂浜の村』というの」

「じゃあ、『煉瓦の街』までまだずっと歩かなきゃいけないわけ？」

光一は気が重くなった。砂浜を歩くのは、舗装された道を歩くのと勝手が違う。普段使わない足の筋肉を使うようで、変な疲れ方を

していた。

「ずっと、たったあと六つよ。そこで宿や食事を取りながら、そうね、三、四日で着くわよ」

「三、四日……その間中このまんまの景色を見ながらただ歩くだけなの？」

その何が苦痛だというのか、ナイアはさっぱりわからないという顔をした。ナイアにとっては『煉瓦の街』に行けるだけでも楽しいのに。彼女は、分らないものに全く関心なさそうに、光一に背を向けるとすたすたと歩き始めてしまった。

煉瓦の街

「煉瓦の街」までナイアと光一の足ではは四日かかった。

泊まるときも、初めて昼食を貰った時と同様だった。ナイアの顔を見た村人は最初あからさまに嫌そうな顔を彼女にみせる。しかし、彼女が光一を前に押し出すと表情を変える。彼らの顔に、この旅の連中に与えてやるものと後で帝国府が支払ってくれるだろうものを思案する表情が浮かぶ。それから顎でしゃくって家の中に招き入れてくれるのだった。

「砂浜の村」の家はどこも貧しく、客人を泊めるような部屋などなかった。だから物置部屋だったり、その家の住人が寝静まったあとの食堂だったりに二人は寝かされた。そういうわけで、夜の間は光一はナイアとゆっくり話をすることができなかった。

四日目の昼、砂浜の彼方に小山のようなものの影が見えてきた。近づいていくと、赤っぽい。更に近づくと、確かに赤煉瓦を積み上げて出来た建物が立ち並んでいる街が見えてきた。

赤煉瓦造りの丸い塔を境に、道も赤煉瓦で舗装されるようになった。長く砂浜に馴染んだ足は地面をつい踏みしめようとするが、そんな力を入れなくても楽々歩いていく。

街中に入っていくにつれて人の姿も増えていった。皆、舗装された道の両端の歩道を歩いている。しかし、ナイアは一段低い車道を歩いていた。

道行く人の服装もナイアと違う。この街を歩く人々は皆綿なり絹なり柔らかい素材で、もう少し立体的に仕立てられた服を着ていた。光一はこちらの世界の人は皆こんなものかと気にしていなかったが、ナイアの麻袋を改造した服はここに来ると本当にみすばらしく、いかにも物乞いといった風情だった。

「あなたは歩道を歩いたっていいのよ」

ただ、みすばらしい格好をしていようが車道を歩かされていようが、ナイアはナイアだった。傲然と顔を上げ、どこか命令口調で光一に言う。

「でも……君が歩道を歩かないのに、僕だけ歩くわけにはいかないよ」

「そんなの、……っ」

ナイアは光一に話しかけるため立ち止まっていた。そこに荷馬車を通りかかり、避けなかつたナイアに荷台がぶつかった。彼女はつのめつて道に手をついた。荷馬車は何事もなかつたかのように走り去っていく。

「だ、大丈夫？」

四つん這いになっているナイアに合わせて光一も彼女の傍に座り込む。その鼻先を馬のひずめと車輪が掠めた。この二つが巻き上げた砂塵が目や口に入る。

「あなただけでも歩道に上がって！」

ナイアが苛立たしげに言った。

「私は自分の身を守るので精一杯なの。あなたの心配までできない。だからあなたは安全な歩道に上がって頂戴」

「でも……」

光一もナイアの言うことはわかる。僕に注意を向けていたら、ぶつかってくる馬車に対する注意がおろそかになる。けれども。

「でも、やっぱり僕だけ歩道につてわけにはいかないよ。僕自分で気をつけるから。僕のことには気にしないで」

「何考えてんだか。だって……」

ナイアは何かを言いかけたが、また向こうから馬車がやってきた。二人とも車道ぎりぎりに身体を横にしてなんとかやり過ごす。あとは、こんな調子で次々に襲い掛かってくる馬車や、その荷台、そこからはみ出している荷物を避けるのに二人とも専念し、互いに喋ることはなかった。

路地に入ると人も馬車も通るものが途絶え、やっと二人並んで歩くことができた。ただ、もう二人ともぐったり疲れてしまい口数は少なかった。

「あそこが宿よ」

ナイアが煉瓦造りの二階建ての建物を指差した。間口は狭い。ここに着くまでにこの「煉瓦の街」の各々の建物はとても間口が狭いことはナイアに教えてもらっていた。基本が砂地で建物を建てづらい土地に、沢山の建物がひしめき合っているので各々の道路に面する部分はごく小さいのだと。その代わり奥行があるのだ、とナイアは教えてくれていた。

普通の民家に見える宿屋の扉を、ナイアは叩いた。中から出てきたやはり彫の深い中年男だった。ただし「砂浜の村」の者と違い柔らかい布で仕立てられた、洋服に近い格好をしている。男は、麻袋の服を纏ったナイアを見て眉間に皺を寄せた。汚らわしいものを目にした不愉快さを隠すことなく。

けれどもナイアは臆さない。

「『海から来た者』の案内で皇都まで行くの。あさつての船に乗るから泊めて頂戴」

宿屋の男は、ふんと鼻を鳴らして言った。

「じゃあ、そつちの『海から来た者』は二階の客室だ。お前は裏の馬小屋だな」

ナイアは肩を竦めただけで、光一に、じゃあね、と言って、隣の建物との隙間から宿屋の裏に回ろうとした。

「ちょっと待ってよ。あの、彼女も同じ客室に泊めさせてください」

光一は宿屋の男にそう頼んだが、相手はてんでとりあわなかった。光一は食い下がる。

「馬小屋で寝ろ、なんて……。ひどいじゃないですか」

「うちに『砂浜の村』の人間なんかを泊める部屋はないね。馬小屋を貸してやるだけでも奇特なもんだ。それを目当てに『砂浜の村』の連中がやって来るもんだから、うちはご近所に苦情を言われて困っているくらいだ。それでも泊めてやろうというんだから、感謝さ

れこそすれ批判されるいわれはないね」

「コーイチ」

ナイアが光一の傍まで戻ってきて囁く。

「たとえ馬小屋でも、この街で『砂浜の村』の者を寝泊りさせてくれるのは本当に珍しいの。ここくらいしかないのよ。あまりこの主人を怒らせないで。怒らせてこれから『砂浜の村』の者には一切宿を貸さない、なんてことになったら村の者みんなが困るわ。母さんだって困る」

光一はちよつと押し黙ってから宿屋の主人に言った。

「じゃあ、僕も馬小屋に泊まります」

「好きにしな」

そう言つて男はバタンと扉を閉じた。ナイアは首を振りながら建物の裏手にまわりはじめた。光一もついて行く。

「全く、コーイチの考えることつてわからない」

「だつて……」

「どうも私に同情してくれているようなんだけどね。あなたが一緒に車道を歩こうが馬小屋に泊まるうが、私が歩道を歩けない、普通の部屋に泊まれないつていうのは変わらないの。二人そろつて不快な思いをするなら、せめて片方だけでも快適な思いをした方がいいじゃない」

「それは……そうだけど」

でも、と光一は思ったことを口にした。

「僕が歩道や部屋で快適な思いをしててもさ、その間君が嫌な目にあってるって思うと、僕も気分良くないよ。だからやっぱり君と一緒にいるよ」

「それで別に私の不愉快さが減るわけじゃないんだけど」

「……そうだね。でも、僕は自分ひとり快適だといたたまれないから……。僕の好きなようにしてもらっていいかな？」

「こつ下手に頼まれるとは思っても見なかったナイアは、しばらく言葉を失ってまじまじと光一を見た。

「わ、私はいいわよ。……コーチって変な人ね」

そっぽを向いて、馬小屋の扉に手をかけたナイアだったが、表情に少しだけ嬉しそうなものがあつた。

船に乗る前に

その夜、ナイアは細々と光一に明日の予定を説明した。

「明日はこの街中で買い物よ」

ナイアは楽しそうだった。やっぱり女の子は買い物が好きなのかな、と光一はのんきなことを考えていた。

「お店の前まで私が連れて行くけど、今日の様子じゃ実際の買い物は光一に任せた方がよさそうね」

「別に構わないけど。どうして？」

「私が買い物しようとしたら、品物を床に放り出されるのが関の山よ。それを這いつくばって拾わなきゃなんない。それを見たら、あなたまた私のことを気の毒がってしまうでしょう？」

光一は苦笑いして承諾した。

「だって、君がそんな目にあつての見てて辛いんだよ。僕が買ったほうがいいなら、そうするよ。で、何を買ったらいいの？」

「シャツ、ズボン、肌着、靴下、もちろん頑丈な靴 底に厚みのあるものね。これから石畳の道を歩くことが多いから靴は大事よ。それに――」

ナイアは細々とした生活用品を挙げ続けた。光一が覚えられない、と言うと自分が覚えているから大丈夫だ、と請合った。

実際、次の日ナイアはあちこちの店に光一を連れまわし、店の前

でそこで買うべき品目を指示した。一軒あたりの買い物は多くても数点だったから、光一にも簡単にできた。

光一にとっては、買い物は日本にいた時より楽かもしれないなかった。彼の顔を見ただけで店の主人は彼が『海から来た者』だとすぐ理解し、必要なものを適当に見繕って品物を包んでくれる。そして光一は何もしなくて構わない。

光一が日本で買い物に苦手だったのは、多くの商品の中から自分で欲しいものを選ばなくてはならないことと、会計を無難に済ませられるかどうか。例えば、お金が足りなくなつて恥ずかしい思いをしないだろうか、とか、レジには若いお姉さんがいるのに何か場にそぐわない行動をしてしまつて笑われやしないだろうか、とかいちいち緊張することだった。

だけど、ここでは、光一は店の主人が選んだものをナイアのところを持ち帰るだけだ。そしてどんな品物を渡されようがナイアは別段文句を言わなかった。けれども、服屋の前に連れて行かれたときには光一はナイアに訊ねてみずにはいられなかった。

「あのさ、このまま僕が買い物してると男物の服しか包んでくれないと思うんだけど……。ナイアの分、どうしよう。女の子の分も下さいって頼んでみようか？」

「私が『砂浜の村』の者である限り、渡されるのは麻の袋よ」

ナイアは自嘲気味に言った。

「男物をたくさんもらつてきて。連れは男の子だつて言つて。大きさは、そうね。あなたと同じくらいのでいいわ」

光一は、ナイアは麻袋が嫌でそれなら男の子の服の方がマシだと考えたのだろうと単純に思った。日本でもボーイッシュな格好を好む子がいるし、ナイアの性格なら似合いそうだな、とも。

「ええっ？ 髪を切るの？」

買い物を済ませ、宿屋の馬小屋に戻ると光一はナイアに鋏を手渡された。これで髪の毛を男の子に見えるように切ってくれ、と言う。

「でも僕、人の髪の毛なんか切ったことないよ。とてもできないよ」

光一の頭には、同級生の女子のショートカットがあった。あんな風にするなんて絶対無理だ。

「上手でなんかなくていいから。男の子くらいの長さにして。それでいいから」

「でも……」

「こつちではね、特に裕福じゃなければ、床屋に行かないことは普通なの。みんな親が切ってるわ。下手糞な親だって一杯いるわよ」

「けど……」

「短くするだけでいいのよ」

「でも……もったいないよ、そんなに綺麗な髪なのに……」

「そんな甘ったるいこと言わないで！」

ぴしゃりと、ナイアが言った。赤ワイン色の瞳が強く光っていた。

「私は別人になるの。生半可な気持ちで人生を変えたいって思ってるわけじゃない」

「……………」

ナイアの迫力に気おされて光一は言葉を失う。

ナイアの方も、言いすぎたと気がついた。でも、なんかコーイチは優しすぎるといふか、考えが甘いというか、イラっとするところがあるのよね。そうナイアは思うが、やはりここは穏やかに説明するべきだろうと思ひ直した。

「明日、橋の向こうへ行くわ。私、今まで橋の向こうへ行つたことないの。向こうへ行けば私の顔を知っている人もいない。私はこれから男の子の振りをする。そして別人になりすます。もう私は、『砂浜の村』のナイアって娘じゃないの」

それに、とナイアは光一をちよつとからかうような目で見た。

「皇都までの旅は長いもの。男の子の格好をしておいた方が安全だと思つわ。もし私が女の子の格好で危ない目にあつたら、コーイチ助けてくれる？ っていふか、助けられる？」

「無理……だと思つ」

「ね。だから私は男の子になる。とにかく私の髪を切って頂戴。ただ短くするだけでいいから」

光一は恐る恐るナイアの栗色の髪を一房手に取り、鋏で軽く挟んだ。そこから力を入れる決心はなかなかつかない。しばらく躊躇つてから、光一は目を瞑つて鋏を持つ手を握つた。

「えいつ」

光一の拳に栗色の髪の束が降りかかった。さらさらしていてとても気持ち良かった。でも、ナイアの頭には、一箇所だけ短いところが出来て、なんだかともいたたまれない気が光一はした。

「これでいいのよ。どんどんやっていって」

ナイアが振り向いて光一を励ます。それで光一は再び、ジヨキつと髪を切り落とす。一部分だけ短い方がかつこ悪いんだから、ショートカットだつてきつとナイアには似合うはずだから、そう自分に言い聞かせながら、次そのまた次と切り落としていく。

光一は自分が床屋で髪を切るとき床屋がどうしていたか、その記憶を頼りに、鋏を縦にしてみたり、掬い取った髪の毛先だけ切つて戻してみたりと工夫を重ねた。その甲斐あつてか、毛先は揃わないものの、なんとかショートカットに近い髪型になった。そして髪を短くしてみると、外見だけなら西洋人形のようなナイアが意外に少年っぽく見える。

「どう?」

「うん。なんか……カッコいいよ。それで男物の服を着てみたら男だと言つても十分通るかも」

ナイアは物陰で男物のシャツとズボンに着替えた。光一はその間ぼんやり考えていた。生まれついた容貌より、こういう風に生きたいという本人の意志の方が重要なかもしれない、と。でも したら、僕はこれからどんな格好をすることになるんだろう。

ナイアが物陰から一歩出てきた。ちょっとだけ眉を寄せて心配そうに光一に尋ねる。

「どう? 男の子でやっていけそう?」

「うん。大体男の子に見える。元が女の子だつて知らない人だったら、ちゃんと男の子に見えると思う」

「そう、良かった」

ナイアは愉快そうに微笑んだ。

「じゃ、コーイチ、私に名前を頂戴」

「へっ?」

「いやあね。母さんの家を出るときに言ったじゃない。私は名前を変えらるって。母さんからこの約束だけは守れって言い渡されてるの。まあ、別に母さんとの約束がどうであれ、ナイアっていうのは女の子の名前なんだもの。いつまでもこんな名前にいるわけにはいかないわ」

そういえば、光一が名づければこちらには滅多に無い珍しい名前になるだろうと彼女は言ってたっけ。

「ね、どんな名前がいい?」

ふつと光一は同じ高校に通っている女の子を思い出した。一番の美少女でめっぽう気が強く、女子達のリーダー的存在だった。ナイアと彼女は光一にとって似通った存在に思えた。もつとも同じ学校の彼女は光一に話しかけたりなんか絶対にしないけれども。

「……美鶴、なんてどうかかな?」

「ミ・ツ・ル……変な名前ねえ」

自分で変わった名前が欲しいと言っていた癖に、ナイアは小首をかしげている。

「僕が知っている女の子の名前なんだけど……、別に男の子がつけなくても変じゃない名前だよ。ああ、親戚に『満』って名前の男の子がいる」

「男女どっちでも使える名前なんだ！ それは格好いいわね」

ナイアの表情がパアツと明るくなった。

「ちょっとまだ変な感じはするけど、名前を変えるっていうのはそういうものよね。慣れないから違和感があるだけで、慣れたら気にいると思うわ」

ナイアは立ち上がり、少し昂揚した様子を隠そうとせず、心底嬉しそうに言った。

「私はミツル。男の子。もう『砂浜の村』の人間なんかじゃないわ。そしてもう誰からも蔑まれたりしない人生を生きるのよ！」

そのワイン色の瞳には、自分にとって足枷でしかなかった故郷と母親からやっと逃れられたのだという解放感と、この先の人生を思い通りに生きてみせるという自信と生命力とが溢れていた。

護符と巫女

「煉瓦の街」に入つて初めて、二人は河岸に出た。河の幅はあまりに広すぎて向こう岸が見えない。ひたひたと水が押し寄せる様を見て、光一はここへ来たとき「水の砂漠」に独り取り残されたようだ」と思ったことを思い出した。でも、今は。今は心強い案内人がいる。

光一は隣を見た。ちよつと華奢だが、少年といつても十分通用するナイア、いやミツルが鼻歌を歌いながら歩いてた。

「あそこに橋があるわ」

ミツルが指差した。確かに河岸から河の中へ向かつて木造りの橋が差し出されている。河の方は広大なのに、その橋は幅が狭く頼りなげで、またその上を歩く人も少なくもの寂しげに見えた。

それをミツルに伝えると、例のごとく明快な返事が返つてきた。

「だって、橋を渡る人なんてあまりいないもの。片道だけでも1時間ほど掛かるんだそうなもの。そんな人通りの少ない橋を大きくする必要ないじゃない。前にも言つたけど、『土の国』では木材つて貴重なんだから」

「『煉瓦の街』で暮らしている人は渡らないの？」

「渡る必要ないでしょ。橋のこつち側の街だけでも生活に必要なものは揃うし。私達の旅の準備だつて十分整えられたじゃない。こつちになくて、あちらにあるのは『上り船』乗り場、あちらになくてこつちにあるのは『下り船』降り場だけ」

「じゃ、この橋を渡るのには旅をする人くらいなんだ」

「そ。で、さんざん言ってるけど、旅をする人間ってというのは限ら

れてるのよ」

ミツルの言うとおり、橋の上は閑散としていた。ミツルはとても嬉しいらしい。人氣が途絶えたときには、くるくる回ってみたりまるで小さな子供のようににはしゃいでいた。

確かに橋は長く、いくら歩いてもなかなか対岸が見えてこない。広い河を橋から見渡してもやはり水面しか見えない。河口付近だからあまりはつきりした流れはなく、海が近いせいか潮風が吹いていた。

ようやく対岸が見えてくるとミツルは駆け出さんばかりとなった。ミツルにとつての新天地。誰も自分を知らないという自由さが彼女を呼んでいるのだらう。歩き疲れた光一は、さっさと駆け出していく彼女の背を眺めながら後ろをマイペースで歩いていた。

ミツルに追いついたのは、ミツルが一軒の店の前でなにか紙切れを手に行っているとところだった。

「なあに、それ」

「護符よ」

ミツルはあまり興味のない様子で答えた。

店の中から、彫は深いが頬のたるんだ年配の女が光一に言った。

「おや、あなた『海から来た者』だね。これから二人で河を遡って皇都まで旅をするんだらう。それじゃあこの護符は絶対に必要だね。特にあんたは」

「あの、護符って何ですか？」

「あんた達を守るお札だよ。あんた達は生命の流れを逆行するんだ

からね。いろんな魔物や呪術者に狙われちまうよ」

「……？」

怪訝に思う光一に、ミツルが説明する。

「前に言ったでしょ。人は死ぬと河に流されてその魂は魚になるって。魂は皇都の『海の源流』に降る雨となってこの世に降りてきて、河によって生まれる土地まで流される。そして、その生を終えると河を下る。これが生命の流れ」

「ああ、うん」

「ところが私達は人の形をとったまま、この河の流れつまりは生命の流れに逆行する、というわけ」

商売女がすかさず割り込む。

「これはとんでもなく恐れ多いことだよ。生命の理に反するものだからね。これじゃ、魔物や呪に襲われても簡単にやられちまうよ。さあ、護符を買った買った。この護符が守ってくれるんだから」

光一はミツルを見た。ミツルは商売女の脅かしにちっとも関心を示した風はなかったけれども、二枚買ってはどうかと光一に言った。それで光一も二枚その女から護符を買ったのだった。

「あの……魔物や呪術って、こっちの世界にはあるわけ？」

「みたいね。私も本でしか知らないけど」

「……この護符っていつので防げるのかな？」

護符はごわごわと分厚い紙に、光一の見たことのない文字が数行に渡って書き連ねられていた。その文字が神秘的で確かなんだか霊験ありそうな感じだった。

「さーあ？」

ミツルは声に抑揚をつけて、自分は疑わしく思っていることを声音で示した。

「だって、紙切れにありきたりの文句を書いているだけよ。旅の途中で皇帝と皇帝に屈服した妖魔とその眷属がこの者の道中を守ってくれますように、って。ただそう書いてあるだけ。文字の読めない人には何だか不思議なモノにみえるんでしょうけど」

自分がまさにそう思っていたので光一は少しばかり恥ずかしい思いをし、それを誤魔化すために聞いてみた。

「じゃ、なんで買ったりなんかしたの？　しかも君の分まで」

「旅をするものが皆買うものなんだったら、私達も買っておかないと怪しまれるかもしれないもの」

「なるほどね……」

乗船場には船が泊まっていた。ナイアいやミツルの話から、光一はこの河がこの世界での主要交通手段なんだろうと思っていた。だから、タンカーとまでいかなかったもせめて見上げる位の大きさの船を想像していた。それが実際に泊まっているのは日本の漁村なんかにあるそうなくらいの大きさの船だった。

確かに、海と同様この河も水底が浅い。大きな船では航行できそうにない。この船も底が平らになっていて、光一が知っている船とは違う形をしていた。

「二人乗るわ……じゃなくて……えっと、二人乗るよ」

ミッルは船の傍で煙草啜えている船員らしき人間に声を掛けた。途中で、女の子言葉を引っ込めて男の子っぽい言い方に変えている。

「もうちょっと待ちな」

船員は煙草の煙をふうつと吹き出してミッルに答えた。

「俺も、もう一台荷物を積んだ馬車が来るのを待つてるところだ。その荷を積んだら出航する。まあ、それまでその辺をぶらぶらしてな」

「じゃ、河沿いでも歩いてる」

「ああ、また後でな」

船員は再び煙草を加え、片手を上げて見せた。

河岸には誰もいなかった。水底がはっきり見えるほどの薄さしかない河が、傾斜のない河原にひたひたと押し寄せている。光一はまた、海の砂漠で自分が感じた恐怖を思い出した。だから、ミッルに話しかける。

「ちゃんと、男言葉使っただね」

「当たり前じゃない。もう私、男の子なんだから」

でも、僕の前じゃ女言葉のままなんだ、ちょっと可笑しいような嬉しいような気持ちに光一はなった。しかし、ミッルは険しい目の前を見ている。

「どうかしたの」

「……何か変」

「何が変だつて言うの？」

「あそこよ。……なんていうか、黒い霞みたいなのが……」

ミツルの指差す先、二人から十メートルくらい離れたところに、確かに黒い霞のようなものが立ち上っていた。二人が息を呑んで見つめている内にそれはますます密度を増していく。やがてそれは黒い布を頭からすっぽり被った老婆の姿となった。

光一はこんな老婆を見たことがなかった。不思議な現れ方や黒マントを別にしても、ここまで年老いた人間は初めて見る。

彼の祖母は、父方母方どちらも健在だ。父方の祖母は、明るい茶色のカツラ　ウィッグというらしい　を被り、色つきサンングラスをかけ、きつちりお化粧する人だ。母方の祖母は、化粧つけは無いが、グレーの髪を上品に後ろで結び、なかなか素敵なお洋服を着、できるだけ背筋を伸ばしている。

目の前の奇妙な老婆は全く違っていた。黒マントから覗く顔の全体が皺だらけで、目の下も頬も肉が弛んでいる。皺と皺の間の皮膚もまるで干からびているようだった。真っ白な髪をそのまま垂らし、髪と頭の重みに耐えかねたかのように腰を曲げ、杖に体重を預けてまっすぐ光一達を見つめていた。その瞳も白く濁って輪郭がはっきりせず、実際に見えているのかどうかわからない。

「……辻の巫女？」

ミツルが暫く沈黙した後、こう呟いた。

「ツジノミコ？　このお婆さんのこと？」

「黒い霧から姿を現し、黒いマントを被った老婆。辻の巫女についてそう書かれているのを読んだことがあるわ……でも」

ミツルは眉間に眉を寄せていった。

「辻の巫女は、辻に出るはずよ」

「辻？」

「道が交差するところよ。辻の巫女はそこに現れて道行く人に予言を下すのよ。でも、ここは」

ミツルは首を巡らせて言った。

「なあんにもない、ただの河原よ。辻なんかじゃない」

「辻は目に見えるものだけとは限らんのじゃよ」

老婆が口を開いた。

「人と人との運命が交差するのも、私から見れば立派な辻じゃ」

「……ここで誰かと誰かの運命が交わろうとしているということですか？」

光一が尋ねる。しかし老婆はそれに答えず、ミツルの方に視線を移した。どうやら目は見えるらしい。

「お前は戻ろうとしているね」

ミツルはきつ、と辻の巫女を強く見て言った。相手が巫女だろうが何だろうが、こういう時の彼女の赤ワイン色の目の強さはかわらない。

「いいえ。戻ったりなんかしないわ。私は出て行くのよ。新しい人生に向かうの」

巫女は別に気を悪くした風もなく淡々と言った。

「いいや、お前は戻ろうとしているよ。それは悪いことじゃない。だけど、今まで母親と平穩に暮らしてきた道からは大きく逸れることになるね」

「望むところよ。『浜辺の村』で蔑まれて生きていったって仕方ないもの。ただ、私は出て行くこととしているのであって、戻るわけじゃないんだけど?」

巫女はミツルの疑問には答えずに言った。

「苦しいこともあるじゃろうよ。覚悟はできているのかい?」

「もちろんよ」

「ならばよい……」

巫女の話が終わりそうだったので、光一は慌てて巫女に話しかけた。

「あのっ、あの……さっき運命と運命の交差するところ、って仰いましたよね。あのう、それって僕とミツル……いや、ナイアのことですか?」

巫女はふふつと可笑しそうに笑った。この老婆が始めてみせる人間らしい表情だった。

「残念だが、そうじゃないね。本当を言うと、あんた達と別の者達の運命が交差するのはもう少し先じゃ。ただあんまり大きな辻になりそうなんだね。こちらのお嬢ちゃんの覚悟を確認してきたのさ」

光一はがっかりしてる自分に気が付いてちよつと戸惑う。僕はどんな答えを期待して、巫女にあんな質問をしたんだろう。僕とミツルとは運命の出会いだ、見たいな御託宣でも欲しかったんだろうか。光一は頬を赤らめる。

「それじゃあ、また、辻に差し掛かったら会いに現れることにしよう。それまで道中達者でな」

巫女の姿がだんだんぼやけ、黒い靄となり、それも空中に拡散してしまった。後には何も残らなかった。

ガラガラガラガラ　馬車の音が聞こえた。振り向くとその荷馬車は停泊している船に向かっていている。

ミツルが肩で大きく一息して言った。

「出航ね……」

時間の環

船の客はミツルと光一以外に、貨物の運搬を生業にしている者が数人だった。船長と皆は顔見知りのようで雑談を交わしながら船は進む。

河の流れは緩やかで、海からは風が絶え間なく吹き付けてくる。この船の大きな帆がその風を全身にはらみ、バサツバサツと空気を受け止める音とともに、船は軽やかに河を遡上していく。

「坊主、『海から来た者』か？」

「え、あ、はい。そうです」

荷運びの男達は気安く光一達にも声を掛ける。

「へえ。俺はこんな顔初めてみたぜ。本当なのっぺりしてるもんだな」

「俺は前にいつぺん見たことあるぜ。やっぱりこの船便で乗り合わせたんだけ。それにお前、皇都に行けばこれほどじゃないけど、のっぺり気味の顔の奴だっているもんだ」

「あの。僕以外の『海から来た者』に会ったんですか？」

光一は勢い込んでその男に尋ねる。

「ああ、お前よりずっと年上で……そうだな、俺たちと同じくらいの歳の男だった。働き盛りだっというのに随分くたびれた顔をしてたなあ」

「あの男か」

別の荷運びも話に加わる。

「俺もその船に乗り合わせてたよ。本当暗い顔してたなあ。『元の世界に帰りたくない』って言うのを、案内人に説得されてたっけ」

光一が複雑な表情で尋ねる。

「その人、帰りたくなかったんですか？」

「なんでも、向こうで首を吊って死のうとしたんだそうだ。踏み台に昇ったところまでは覚えてるが、その後気を失って、次に目が覚めたらこちらの海の中だった、とさ」

別の男が訊く。

「そいつはなんでまた、死のうとなんかしたんだ？」

「なんだか、働いてた先から首にされたみたいなのを言ってたがなあ。それが死ぬほどのもんなのかねえ。別に俺たちみたいに荷運びになるなり、宿屋を開くなり、別の商売をはじめりゃいいと思うがね」

そんな簡単な社会じゃないんだ、あつちは。光一は、その『海から来た者』に代わって説明してやりたかった。けれども光一自身も、大人の社会は大変だくらいしかわかっておらず、うまく説明することができない。

「でも、家族は待つてるだろうに」

「そうそう、それを言われてその『海から来た者』も帰る気になつたらしいがね。坊主も早く帰って親を安心させてやれよ」

「……はい」

僕だつて必ずしも元いた世界に戻りたいわけじゃない。こちらの世界とどっちがマシか比べているところなのだ。そんなことは言えず、光一は俯いてそう答えるだけだった。

「で、案内人がそっちの坊主か」

荷運びの一人がミツルに声を掛ける。

「は、はい。……あ、ああ、そうだよ」

ミツルは慣れない男言葉にちよつと苦戦気味だ。

「随分細っこいけど大丈夫か。旅は長いぞ」

「大丈夫だよ」

「見慣れない顔だなあ。俺は『煉瓦の街』に普段住んでるけど、お前に会ったことはないよ」

光一はひやりとする。ミツルの顔も少々強張っていたが、さりげなく返した。

「おじさんは、『煉瓦』の街のどっちに住んでるの？」

「上り船の出る側だ」

「わた……僕は、下り船降り場の方だよ。それも街外れに住んでる。たまたま浜辺に用事があつて行って見たらこいつを見つけたんだ」

「ふうん。ま、俺も船を降りたらすぐ橋を渡つて自分の家に帰っちゃうからな。そっちの方をうるついたことは無い。知らない奴は一杯いて当然だな」

その男は笑つて話を収めた。光一もミツルも、控えめに大きく息を吐いた。が、次の言葉に二人はまた緊張する。

船長が言った。

「まあ、案内人が普通の奴で良かったよ。やっぱり『海から来た者』は海に現れるからさ、『浜辺の者』が案内人になることもあるんだ」
「浜辺の者？」

光一が嫌な予感と共に聞き返した。

「ああ、『砂浜の村』に住んでいる奴らだ。汚らしい連中だぜ」
「へっ」

別の男が吐き捨てるように言う。

「『浜辺の者』なんかと乗り合わせんのなんて、勘弁勘弁」
「あんな気味悪い連中と長旅なんて、俺なら途中で降りて船を変え
るね」

「坊主が『浜辺の者』でなくて良かったよ」

一拍置いてミツルは答えた。

「……あんな連中と一緒にしないでくれよ」

彼女のワイン色の瞳に強い光が浮かんでいる。それは言葉通りあんな賤民と一緒にしないでくれという怒りでもある。が、それとともに、本当は彼女自身とその賤民に生まれついてしまったのだという悲しさや悔しさも含んでいた。

「そろそろ昼飯にしようぜ」

光一の緊張や、ミツルの複雑な葛藤をよそに、のんびりした声で

船長が言った。そして、話題は全く別のものに移り変わっていった。

「山よ、山だわ！」

と思わず女の子言葉で言ってしまったって、ミツルは急いで辺りを見回す。幸い近くにいたのは光一だけで、他には誰も聞いていなかった。

「ほら、山があるじゃない」

ミツル興奮した様子で光一を呼び寄せ岸の方を指差す。

「山………ていうか、丘じゃないかなあ」

船は出港してからしばらくは、見渡す限り水平な牧草地の中を進んでいた。ところどころ木が行儀よく一列に並んでいるのが見えたが、あれは防風のためだと客の一人が教えてくれた。

それがここにきて、地面に多少起伏がついてきている。けれども、三十分もあれば走って上り下りできそうな、牧草で覆われた丘を山だとは言いかねる。確かに、地平線ばかり見てきた目には、そんな丘でも次から次へと現れる風景は目新しいけれども、山だと思って興奮するのは間違いだろう。

「山っていうのは、もっと大きいものだよ」

「………そうか………」

ミツルが顎に拳をあてて何かを思い出そうとしている。

「確か、登っても登りきれくらい長い坂道があるのよね。で、木がたくさん、それも無秩序に生えてるんでしょ。そして、熊とか狼とかふくろうとか見たこともない動物が一杯いるのよね。うん。母さんの本にはそう書いてた。そうね、あれは確かに山じゃない」

真剣な顔で頷くミツルをみて、光一は笑って言った。書物でしか山というものを知らず、いちいち現実と照らし合わせて大真面目に確認する様がおかしかった。

「そうか、君は山を見たことがないんだもんね」

「あつちにはあったの？」

「うん。時々登ったよ」

「へえ。いいわねえ」

丘は次から次へと現れる。荷運びの男の一人が遠くから声を掛けてきた。

「そろそろ『石の国』が近づいてきたぞ。牧草地が終わって森が見えてきたら『石の国』だ」

いよいよ『土の国』を出ようとしている。男の言葉にミツルはぐっと唇を引き結んだ。光一の方も新たな局面を迎えて胸が高まる。

ところが、何度もこの河を行き来しているはずの他の客たちまでもが、不安げにざわついてきた。

「何か……何か変じゃねえか」

「時間がかかりすぎる。いったい何時になったら牧草の丘を抜けられるんだ？」

「いつもはこんなじゃないよな。もうとっくに『石の国』の最初の

港に着いている頃だ」

光一は男達の方に近寄って聞いた。

「何か……変なんですか？」

船長が厳しい顔で答えた。

「坊主、今あそこに赤い屋根の小屋があるよな。見えるか？」

「ええ、あれですね」

「覚えておいてくれ」

船長はそう言うと、そのまま無言で船を前に進めた。他の客も船長と光一のやり取りの後、固唾を呑んで船の行く手を見つめている。船は沈黙を載せて丘陵地を進んでいく。

「やっぱりだ」

船長が呻いた。さっきの赤い屋根の小屋が、行く手に現れた。

「さっきから何度も何度もあの赤い屋根の小屋に出くわすんだ」

船長は苛立たしげに叫んだ。その船長に客達が口々に疑問をぶつける。

「どついうことだ？」

「遡ってないってことか？ 船は進んでいるのに？」

「堂々巡りをしているような感じか？」

船長はがっくりと肩を落として答えた。

「あれだ。『時間の環』だ。あれに嵌っちまったんだ」

しばらく船の上は静まり返った。ややあってから誰かが尋ねた。

「『時間の環』……って何だ？」

「それに嵌っちまうと、同じ時間をくるくる回るんだよ。何とか時間が進まないんだ」

「船でいうと、同じところをくるくる回ってるってことになるのか」「そつだ。俺も話だけは祖父ちゃんから聞いたが、こんなのは初めてだ」

船長はそう呟いてから、はっと顔を上げて客全員の顔を見渡す。

「護符を、護符を持ってない奴はいないか？」

誰も答えない。光一が船長に質問した。

「護符と『時間の環』と何か関係あるんですか？」

「『時間の環』が起きる原因は、はっきり一つと決まってねえ。だが、呪の力で起きることもあるらしい」

「誰の呪だよ」

他の客が聞く。

「『生命の河』を遡るんだ。命の流れと反対方向に移動しようっていうんだからな。上りの船っていうのはもともと魔術や呪に掛かりやすい状態なんだ。だから、護符を皆持つんだが……」

男の一人が上ずった声を上げた。

「お、おいらは護符を持つてるぜ。それにおいら、何回もこの河をその護符を持って往復してる。それでこんな目に遭ったことはねえ。だから、だから絶対おいらじゃねえよ」

その男がそう言ったのを皮切りに荷運びの者全員が口々に同じような主張をした。

「この船に乗るのが初めての奴は……」

その言葉とともに船上の全員の視線が光一とミツルに突き刺さった。

「何だよ、わ……僕だって護符は買ってあるよ」

ミツルは大声で早速反論した。

「じゃあそつちの『海から来た者』か？」

光一が何か言う前にそんな声が上がった。

「違つだろつ。『海から来た者』は皇帝に歓迎される。皇帝のご加護があつたつていいはずだ」

船長が言った。

「そつだな。じゃあ、やつぱり案内人の坊主だ」

「違つ。僕じゃない！」

ミツルの抗弁を誰も聞かない。

「偽物の護符でもつかまされたんじゃないのか？」

「こいつか、こいつの親のどっちかが誰かに恨まれて呪を掛けられているんじゃないか？」

「とにかくこいつを置いていこう。大体『海から来た者』の案内なんて誰だっかっていいんだ。誰か俺たちの中で皇都まで荷を運ぶ者がついでにやればいい。船長、今度船を付けられるところがあつたらこの坊主を下ろしちまおう」

「嫌だ！ 降りない！ 降りたくない！」

蒼白な顔でミツルは叫ぶ。光一は自分の胸もドキドキするのを感じた。旅に出ること。それはミツル いやナイアの積年の願いだつたはずだ。差別、いわばイジメから逃げ出し、新しい人生を掴むための。ここで船を降りてしまつたら、彼女の千載一遇のチャンスが失われてしまう。どうしよう、と考える前に光一は声を出していた。

「あ、あの」

光一はミツルと男達が殺気立って言い争う声に、なんとか割って入った。

「あの……僕、僕は護符を持ってません。えっと、そんなのが要るって知らなくて」

ミツルが呆気に取られた顔で光一を見ている。そして唇を動かして何か言おうとするのを光一は目で制した。

「だから、僕が船を降ります」

「でも、お前が船を降りるならその案内人だつて船を降りてもらおう

ぞ。この帝国では理由無く旅はできないんだからな」

「ええ。……ごめんね、ミッル。一緒に降りてくれるかな？」

「え？ あ、ああ」

光一とミッルのやり取りに誰かが声をかけた。

「謝ることなんかねえよ。まったく、船に乗るのに護符を持たせておかないなんて、なんて間抜けな案内人なんだよ」

「やれやれ」

そついいながら、男達はめいめい自分の座り心地のいい所へ散っていった。

しばらくたって、船から飛び移るのに丁度良さそうな岩が見えてきた。船長は船を横付けて、言った。

「悪いな。ここで降りてくれ。ただ、ここは『石の国』の国境のすぐ近くなんだ。もし呪が『生命の道』つまり河にだけ掛けられているのなら、歩きでだったら国境を越えられるはずだ。河沿いを探せば街道に出る。その道を行けば半日足らずで『石の国』の国境に出るはずだよ。じゃあな」

船は二人を降ろすと、再び河の真ん中へ戻り、風に吹かれて上流へ進む。二人は暫く岸に立ったまま船の行方を追った。船は広大な河の中をすいすいと運ばれていきだんだん小さくなって最後には見えなくなった。そして、二度と姿を現さなかった。

「なんで嘘なんかついたのよ？ あなた護符は持ってたじゃない」

船の影が消えると、ミツルがぽつりと言った。

「え？ うーん。でも、ああ言わないと君だけ船を降ろされてしま
いそうだったろう？」

ミツルは何か癢に触るといった表情のまま訊ねてきた。

「『煉瓦の街』でも随分私に同情してくれたみたいだけどね。私に
同情なんて結構よ。私は自分の道は自分で開くんだから」

そういうとミツルは河沿いに歩き始めた。光一はミツルの怒りに
戸惑いをかくせないまま、きよとんとした顔で彼女の後に従った。

ミツルは少し肩を張り気味にして早足で歩く。その背を見ながら、
光一はこういうことだろうかと考えた。自分がイジメにあっている
ときも、何人かが解決するために世話を焼こうとした。担任の教師
だったり、保健の先生だったり。助けて欲しい気持ちはあるけれど、
僕は「イジメなんてありません」と彼らの申し出を突っぱねていた。
プライド、というそんな輝かしい理由ではなかったように思う。何
だか人の手を借りてしまうと、自分がひどく頼りない人間になって
しまいそうな気がしたから。そんな理由だった。

今ミツルが光一の手を借りたことに腹を立てているのは、これと
似た気持ちがあるからかもしれない。

「あの……」

ミツルが振り向く。

「君のためだけじゃないんだ。僕が、あの人達より君に案内して欲
しかったんだよ」

「どうして？」

「船の上で、僕より前に来た『海から来た者』の話をしてただろう？」

「仕事を首になって死のうとした人のこと？」

「うん。でも、船の人達はそんなこと大したことない、仕事を変えればいいって話してた」

「それで船の人たちが嫌だったの？ でも申し訳ないけど私も似たような感想しか無いんだけど……」

「会社ってというのは……うーん、何ていったらいいのか。大きな商店みたいな所……これも違うかな。でもまあ、凄く大きな商店みたいなものに勤める人が多いんだ、あっちの世界は」

「ふうん」

「そこから出て行って一人になるっていうのは大変なんだ」

「そのカイシャ以外に働き先はないの？ 農作物を作るとか荷運びをするとか」

「それはそれで元からそれを仕事をする人もいるし、会社に再就職が出来なかつたら仕事を選んでいられなくて、初めてでもそういう仕事に就くことにする人もいると思うよ。でも……」

そうじゃないんだ、と光一地面を見ながら溜息をつく。

「何か一つの集団から外れるととても辛い社会なんだ、あつちは。」

単に仕事を見つめるかどうかっていうことの前に、その人は自分が所属していた集団から弾き出されたっていう事実が辛かったんじゃないかなって思う」

ミツルも光一のこの説明には興味を引かれたようだった。

「一人になると、ただ一人だっただけで、掌を返すような人もいるし……。何と言うか、その人がいた社会からは転落したかのよ

うな感じになるんだ」

「はぐれ者、って感じかしら」

光一はちよつと目を見開いた。

「そうそう、そんな感じ」

「それは確かに辛いわね。村に所属してなくて、胡散臭いものを見るような目で見られて。まるで母さんと私みたい」

「僕もそんな感じなんだ。僕達は学校っていう強制的に文字とかいろいろ覚えさせられる施設に行くんだけど、その中でグループが出来るんだ。でもグループに入れない人間、つまり、はぐれ者なんかは目に見えないかのように無視されたりするんだ」

「似たようなものね」

ミツルは天を仰いだ。

「あつちもこつちも人間て同じなのね。よくわかったわ。コーイチの話」

「うん、だから僕の気持ちを分かってもらえる人に案内人になって欲しかったんだ。だって、僕はここに居場所があったらこつちの世界で生きようって思ってるわけだから」

「ああ、そうか。私以外の人間が案内人だと『海の源流』から帰るしかなくなつちやうもんね」

それから柔らかな光を帯びた赤ワイン色の瞳で光一を見て言った。

「私達、似たもの同士だもの。一緒に頑張りましょう。さて、まずは歩いて『石の国』を目指さなきゃね」

「うん」

二人は微笑むと歩調を合わせて歩き始めた。そして間もなく細い小道は、きちんと整備された大きな街道に繋がっていた。

国境の二人

二人は丘陵地の中を、踏み固められた街道を通って進んでいった。街道から、少し離れて森がこんもり茂っているのが見える。ミツルは「あんなに木が一杯生えているのは見たこと無い」と言いながら眉間に皺を寄せてその森を見つめている。そんな物珍しげなミツルの様子が光一には面白かった。

街道が丘陵に合わせて登りになったり下りになったりする。それに合わせていつの間にか前方に灰色の大きな壁が見え隠れするようになった。

近付くと、その壁は大きく長方形に切り出された石を積んで造られているのが分かった。壁の端の方は良く見えない。うんと遠くにある青い山影に吸い込まれるようにただ延々と続いていいる。

街道はその壁に穿たれた大きなトンネルに続いている。そこに鎧をつけた兵士が立っていて、出入りする者達に声を掛けていた。ここが「石の国」の国境のようだった。

光一は不安になって、石壁のそばまで行く前に足を止めた。ミツルが怪訝そうに振り向く。

「あのさ……。僕達は、呪っているのを掛けられて、船では『石の国』に入れなかったんだよね。ここはどうなんだろう？ 入れるのかな？」

「入ろうとしてみなきゃ分らないじゃない」

「そりゃそうだけど……。僕、まだ状況が飲み込めてないんだ。こちらの世界に呪っているのがあるんだね」

「みたいね。私も本でしか知らないけど」

「……どこかでこんなやり取りしなかったっけ？」

「多分、乗船場の護符売り店の前でしたわよ」

「そうだ、護符！ あれ僕達二人とも買ったのに駄目だったってこと？」

「そうみたいね」

「でも、他の人たちは護符があるから大丈夫って言ってて、事実僕達が降りたらちゃんと河を遡っていったんだよね？」

「そうね」

ここでやっとミツルは光一に向き直った。

「あなたか私、あるいは両方に呪が掛かっているのかもしれないわね。護符が守りきれないような呪が」

「護符が守りきれないって……」

「前に、河沿いの『土の国』『石の国』『森の国』以外に、河から離れたところにいろいろ蛮族がいるって話をしたでしょう。その全てが知られているわけじゃない。皇帝に従ってるのは一部の蛮族に過ぎないわけだし。だから未知の蛮族が何か私達の知らない呪を用いることはあると思う。知らないものは防ぎようないでしょ」

「まあ、そうだけど。でも、話からするとその蛮族の人たちって河から遠いところにいるんだよね？ そこからでも掛けられるものなの？ それにもっと根本的な問題としてさ、僕達に掛ける理由があるの？」

「私に聞かれたってわかんないわよ。もう一つの可能性は、船長も言っただように皇都の貴人の誰かが掛けているのかもしれない。皇帝は『海の源流』を護る存在なの。その皇帝に連なる貴人の位によつては、ただの護符を破る程強い呪を河に掛けることもできるかもしれない。ただ、それがどうして私達なのかはやっぱりわからない」

「そもそも呪がかかっているのが、僕なのか君なのか、あるいは両

方になのかもわかんないよね」

「私ってことはないと思うけど……」

ミツルは当惑した顔で言う。

「でも、僕だって……。僕も自信がないけど、君のお母さんや船の人の話では『海から来た者』は皇帝に歓迎されるそうじゃないか」
「あなたが『海から来た者』の中でも特別だったりとかするかもしれないわよ？」

「特別って……？ 例えば？」

「……それは……わかんないけど」

「それじゃあ……」

不安げな顔で光一は更に言い募ろうとする。けれども、ミツルは苛立たしげな様子を隠さず、強い口調で遮った。

「とにかく」

ミツルの語気に押されて光一は口を噤む。

「私とあなたであの国境の門をくぐって見ましょ。そしたらまた考える材料が出来るじゃない」

「でも……」

「んもっっ」

ミツルが腰に手をあてて大きな声を出した。

「ウジウジ悩んでたって仕方ないでしょ！」

「だって……」

「じゃあ、早いとこ試してみて白黒つけましょう。駄目だったらそ

の時はその時よ」

「その時って……駄目だったらどうするの？」

ミツルは盛大に溜息をき、そして光一に壁を指差して見せた。

「夜にでもこっそりこの壁を登ればいいじゃない。私が本で読んだ歴史書によるとね、共に帝国の配下に下る前に『土の国』と『石の国』が戦乱状態だったことがあるの。この積み石の古さからするときっとそのときに作られた古い城壁だと思っわ。この壁、高さが余り無いでしょ。騎馬の進入を防ぐのが目的だから」

確かに、この石積み壁の高さは光一たちの身長は二倍弱といった感じだった。ロープとか調達すれば乗り越えるのは不可能ではないかもしれない。

「君って凄いなあ」

光一は歴史の勉強が苦手だったから、自力で歴史の知識を身に付け、更に目の前の事態に当てはめられるミツルを素直に賢いと思った。そして、いざとなったら乗り越えてしまえ、なんて考えつく大胆さにも感心した。ミツルには頭脳も度胸も備わっている。

「凄いよ」

光一は心から感心して繰り返した。ミツルは満足そうににんまりと笑った

「さ、行ってみましょ」

と歩き出した。

「行くわよ」

ミツルは光一の腕をひつつかみ、兵士が守るこの国への入り口に向かう。

「やあ、君たち。ちょっといいかな」

気がつかなかったが兵士の隣に小机があつて、こざっぱりとした身なりの男が座っていた。手招きされて二人はその小机の前に立つ。

「ええっと、まずお名前は？」

男は何か書類に書きつけながら光一とミツルに質問する。どうも入国審査の係員といったところらしい。

「僕は『煉瓦の街』のミツル。浜で『海から来た者』を拾ったので皇都に向かっているところです」

落ち着きすぎているほど落ち着いて、ミツルが淀みなく説明する。「拾った」なんてまるで物扱いなのは気に掛かるが光一も続けて自分の名を告げる。

「あの、『海から来た者』の光一です」
「へええ」

入国審査官はじいっと光一の顔を見つめている。

「君が『海から来た者』かあ。会ったことがある人間なら知り合っているけど、僕が実物を見るのは初めてだなあ。やっぱりのっぺり

しているんだね」

とは言うが、この入国審査官も周りにいる兵士も「土の国」の間ほど彫りは深くない。日本人でも「濃い」顔、ちよつと昔でいう「バタ臭い」顔なら、ここの国の人と並んでも違和感がないかもしれない。肌の色の方は透き通るほど白くて、これは日本人とは違うけれども。そう言えば、ミツルの顔立ちも「土の国」より「石の国」の人に近いような気がする。お母さんはもともと「石の国」の人だったのかな。

そんなことをぼんやり考えていた光一は、次に入国審査官が何気なくした質問に、一気に冷水を浴びせられたような気がした。

「どうして『海から来た者』と案内人の君がこんなところにいるの？ 『煉瓦の国』から皇都行きの船に乗らなかったのかい？」

時間の環については言わない方がいい。でないとい怪しまれる。二人は顔を見合わせ、このことを目だけで確認する。

変に目をつけられてしまうと、ミツルが男の子の格好をしていることや、名を偽っていることまでばれてしまうかもしれない。これがばれれば、ミツルは「砂浜の村」に、光一は「海の源流」に直行だ。それは困る。

「船には乗ったんです」

ミツルが答えた。光一はそつとミツルの顔を伺う。かすかに顔を強張らせているが、ミツルはすらすらと答えた。

「でも、僕、船に乗るのが初めてだから気分が悪くなっちゃって。

それで途中で降ろしてもらったんです」

「ああ、船酔いしちまったんだな。そりゃ大変だった。じゃあ、ま、この街で休んでまた船に乗るんだね。乗ってるうちに慣れるものだよ」

入国審査官は引き出しの中から地図を取り出し、ご丁寧にこの国境の門と最寄りの船着場に丸をつけてミツルに差し出した。

ここを通り抜けられても、船に乗ったらまた時間の環に嵌るんじゃないだろうか。乗るたびに時間の環に嵌っていたら、光一とミツルの二人連れは人の目を惹いてしまっただろう。

「あの……その船酔いって本当に辛くって。だから、船以外に皇都まで行く方法はないでしょうか。例えば歩いていくとか」

ミツルが本当に困った顔をし、苦しそうに手を胸に当てて入国審査官に訊ねる。

「皇都まで歩いていくって？ さあてそんな奴聞いたことないなあ。船に乗りなさいよ。『石の国』はいろいろ産業が盛んだからさ、街ごとに港があるんだ。ちよつとずつ乗って、気分が悪くなったら降りて休めばいいよ」

「でも……あんな気持ち悪い思いなんか、もうしたくない……」

ミツルは眉間に眉を寄せ、吐き気を抑える仕草をしながら訴える。

「うーん。まあ、街と街の間には当然街道があるからなあ。それを歩いて『石の国』の中を皇都の方角に向かうことはできるがねえ。ただ、『石の国』と『森の国』の間にはとても高い山脈が聳えていてねえ。普通の者はまあ山越えなんかせずに船に乗るもんだよ」

「普通じゃない人は山を越せるんですか」

と光一が尋ねた。富士山くらいなら、しっかりと装備などを整えておけばなんとか越えられるかもしれない。小学校の時、家族旅行で富士山に登ったことを自慢していたクラスメートがいたことを彼は思い出していた。

「何か事情のある人間。まあ、犯罪者だな。そいつらが逃亡するときに使う。手配書は真つ先に河沿いの港に出回るからね。そうそう、それから皇帝軍が山を越えて進軍することもある」

「河を使わないで？」

「そう。その時々編成によるけどね。大編成の時には馬やら大砲やら寝泊りする天幕やらいろいろ持つていくから大きな軍の船を使う。でも国境の巡回くらいなら、兵士や馬の鍛錬を兼ねて少なめの編成で山を越えることもある」

「……………」

光一もミツルも考えていることは同じだった。それなら自分たちだって山越えができるかも知れない。しかし、そんな二人の考えを見通すように入国審査間が言った。

「言つとくけど山越えは危険だ。訳ありの者が通る道だ。おまけに皇都で何か金目のものを盗んだ奴も通るからそれを狙った山賊も居る。子供二人で越そうなんて危険すぎる」

「わかった」

ミツルが頷きながら言った。

「『石の国』を歩いて、あとは船に乗ることにする」

「そうそう、それが無難だよ」

それじゃ、と入国審査官はトンネルの出口をペンで指し示した。

「『石の国』によろこそ」

ミツルは自然な笑顔で、光一はややぎこちない笑顔でそれぞれ会釈してトンネルの出口へと向かった。

「じゃ、私が先に入るわよ」

当然のごとくミツルはそう宣言すると、暗いトンネルから明るい陽光の注ぐ外へ踏み出した。何も変わったことは起こらない。

「……それじゃ、僕も」

目を瞑って光一も日差しの中に飛び込んだ。そして何も変わったことは起こらない。

「……大丈夫ってことかな？」
「もう暫く歩いてみましょう」

ミツルが先に歩き出した。道路は四角い平らな石で舗装されていた。アーチを多用した石造りの建物が街道沿いに続いている。いくつかの建物はテラスを持ち、ヨーロッパのオープンカフェのように店の外にも椅子とテーブルが並べられていた。

いかにも旅人といった風情の、ちよつとぼさぼさの髪と草臥れてはいるが頑丈そうな靴の若い男が、大きな荷物を脇に置いてマグカップで何かを飲んでいる。この街の人らしい普段着の老夫婦が、ガラスの器で鮮やかな黄色のお茶を飲みながら談笑している。休憩の

時間になつたらしい兵士が椅子の一つにどさりと座り込むと、おおい、と店の者を呼んだ。

休憩中の兵士の注文を取り終えた店員を、ミツルが捕まえた。

「あの。僕達『海から来た者』とその案内人なんですけど、ここでお茶か何か飲めますか？」

五十がらみの頭のはげた店員　どうも店主のようだ　は珍しげに光一の顔を見、それからにこやかに答えた。

「ええ、できますよ。確か帝国府が後で払ってくれるんですよ。大丈夫です。どこでも座つて下さい。今日はナキユールのお茶がお勧めですよ」

「じゃあ、それを二つお願いします」

そう言つてミツルは手近の椅子に腰掛けた。同じテーブルに光一も腰を下ろす。

「今のところ、特に時間が巡つたりしてなさそうだね」

「そうね。上手くいってるみたい」

店主がお茶を運んできた。向こうの老夫婦の楽しんでいる鮮やかな黄色のお茶だった。

「甘いね！」

光一はそのお茶を一口啜ると嬉しそうに小さく叫んだ。今までの食事や飲み物は決して口に合わないことはなかったけど、質素で味の楽しみとか考えられていないものばかりだった。

「ナキユールっていうのはつる草よ。葉を干してお茶にすると黄色い色が出る。濃く煮出すと染料にもなるわ。甘みはつるの部分にあるの」

「『土の国』にもあった？」

ミツルはコップに口をつけたまま首を振る。

「母さんの本に書いてあったの。母さんの本には植物に関するものが多かったのよ。本で見ただけで私も実物を飲むのは初めて。本当に甘いわね」

甘いものは人を幸せな気分にする。光一は珍しく楽観的な予想をした。

「もう大丈夫そうだね」

「そうね、きつと大丈夫」

ミツルもにっこり微笑む。緊張のほぐれた彼女は、男の子の格好をしていてもやっぱり可愛らしい女の子だった。

「結局、呪は河にしか掛かってないみたいね。無事国境を越えられたから、呪が私に掛かってたのか、あなたに掛かってたのか、それとも両方なのかはわからないままだけど」

「まあ、しばらくはこのまま『石の国』を歩いて『森の国』を目指せばいいんだよね」

「そうね。『森の国』に入るのはどうするかは問題だけど。まあ、『石の国』でいいところが見つかったらそこで旅を止めればいいわけだし。とにかく先の話よね」

時間の環に嵌って以来、旅の行方が怪しくなって二人は緊張の連

続だった。もう、今日はここでゆったりと寛ぎたい。目ざとくミッ
ルはこの店の入り口にベットのマークが掲げられているのを見つけ
た。今夜の宿はここで決まり、だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8874v/>

水の砂漠の魚たち

2011年10月13日20時33分発行